

キダー博士の蔵書 ——学者として歩んだ道——

小 山 修 三

1. はじめに

2015年5月、米国ノースカロライナ州の小さな町クロスノアに行った。プレスビテリアン教会でおこなわれた、キダー博士の一周忌のメモリアルサービスに参列するためである。その時、遺族の息子たちから、先生が最後まで手を入れていた原稿をしかるべき専門誌に掲載できないかということと、残された蔵書をどう処理すべきかという相談を受けた。

論文は「薬師寺講堂弥勒三尊像」と題し、晩年に力を注いでいた *THE LUCKY SEVENTH: Early HORYU-JI and Its Time* [法隆寺とその時代] (ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum, 1999) のスピン・オフと言うべき日本の初期仏教美術に関するものであった。これについては、M. ウィリアム・スティール教授と湯浅八郎記念館のスタッフに相談した結果、本誌での掲載が決まり、責を果たせたことを嬉しく思っている。

蔵書については、量が膨大で、しかもほとんどが日本語で書かれた専門書であるために、近隣の大学や研究所などに問いあわせてみたが引き取り手が見つからないと言う。数年前の豪雨で書齋が浸水した後の処置が悪かったために傷みがひどいものもあるのだが、その価値は失われるものではない。まずはリストを作るべきだと考えて調べることにした。私は教え子、助手、同僚、友人として先生と長い年月をともに過ごしたので、これらの本が集まったきっかけやプロセスがわかるので懐かしさのあまり作業がはかどらなかった。ここでは、その時のメモを見ながら、蔵書を通じてキダー先生が学者として歩んだ道を振り返ることにしたい。

2. 学者への道

アカデミック・キャリアとは資格さえ取れば開けるのではなく、その時代の社会・経済の情勢や人間関係に左右される「運まかせ」のところがあることは、私の経験からみても強く感じる。まず、専攻で何を選ぶかが大きい。先生の学者への道はニューヨーク大学大学院に入った時から始まった。もともとモノが好きで収集癖があり、宣教師の子として中国で少年時代を送ったことから中国美術を選び、古代青銅器について修士論文を書いた。ところが博士論文ではテーマを日本の縄文土器に変えている。これは、縄文土器の過剰ともいえる装飾が、殷・周時代の中国青銅器に影響されていたのではないかと考えたからだと聞いた。意表をついた発想で大変おもしろい。縄文時代はヤバンで閉鎖的な未開社会だと考えるのが常識

の時代だったからである。当時のアメリカでは東洋研究がけっこう盛んで中でも中国美術研究者の数がたいへん多かった。競争の少ないマイナーな地域だった日本に視点を広げたことが成功したのである。

社会的状況も重要である。第二次大戦後、世界は大きく動いていた。とくに中国では政権を握っていた国民党が、共産党との抗争に破れ、1949年には中華人民共和国となった。そのためにアメリカとの関係が閉ざされてしまう。それに対し、日本は朝鮮戦争をきっかけに、めざましい経済復興を遂げる足場を整えつつあった。ほかにミャンマーなどの選択肢もあったようだが、先生が日本を選んだのは幸運で賢明な判断だったと思う。

3. 日本へ留学

日本美術への道が定まったのは、1953年にフルブライト奨学金を得て京都大学に留学したことによる。京都大学は戦前から中国研究が盛んだったが、ほかに弥生・古墳時代から飛鳥・奈良時代の発掘や調査での長い歴史と実績を持ち、日本考古学の中核のひとつであった。指導教官となった梅原末治博士は中国青銅器の権威だったが、すでに興味の対象を日本の縄文に移していたキダー先生が資料室の隅に山積みになっていた縄文土器の箱ばかり調べるので不審がられ注意されたらしい。それでも、京都に住んでいるという地の利を生かして、飛鳥・奈良地方の古代遺跡や寺院を精力的に見て歩きはじめる。写真や青図の資料による研究が普通だった時代、実物を現地で見ることができるのは大きな利点であった。そして学生的身でありながら、戦前からの京都帝国大学調査報告書や、縄文研究の基本文献となる「考古学雑誌」のほか、当時すでに廃刊し古典とされていた「史前学雑誌」なども買い揃えていることから、当時ドルの円に対するレートが高く、フルブライト生でも経済的に豊かだったことが分かる（今では想像もつかないことだが）。

当時、縄文研究の中心は東日本にあったので、第一人者である山内清男博士を訪ねて東京大学に何度も出かけている。また、東京ではICUで教鞭を執っていたヒューゴ・ムンスターバーグ博士との出会いがあり、後任の誘いを受けたことで、先生のその後の道が決まったのである。創草期のICUは、日本の伝統を残す他の大学システムとは一線を画しており、社会的評価も定まっていなかった。施設そのものも揃っていないという不安定な状況下で、博士の後を引き受け、就職を決めたのは、ずいぶん思い切った判断だったと思う。縄文人的パイオニア精神と言うべきだろうか。

4. ICUに着任

1956年に準教授に就任したICUでは美術史および考古学を担当し（退職まで30年以上続けられた）、一般教養科目や基礎科目で、美術史概論を講義した。本人は「Bread and Butter（飯の種）」だと苦笑いしていたが、スライドを使って、古代から近現代美術の基礎を広い視野からとらえる手堅い内容だった。私がさらに専門的なクラスはないかと聞きに行く

と、「教えられることはすべて教えた。後は自分でやるように。相談にはのる」と言われた。アメリカ式の教育方針である。その頃の ICU には美術史や考古学を専攻できる大学院はなかったの、さらに学びたい学生は他大学の大学院に行かなければならなかった。しかしこのようななかで、キダー先生のもとから数多くの美術史・考古学の研究者——たとえば、江上綏、相馬隆、山本忠尚、関隆志、及川昭文、本郷一美さんらが育っているのは大きな功績と言うべきだろう。また、のちに旅行や仕事で海外に行った友人たちから、あの授業のおかげで現地を楽しめたという言葉もよく聞いた。今日、ICU が一般教養 *general education* を重視することで注目を浴びているのは当然なのかもしれない。

5. 縄文遺跡との出会い——美術史から考古学へ

ICU キャンパスに住むことで、キダー先生の研究に、「実際に発掘をおこなう」という実践考古学の領域が加わることになった (*View from the Trenches of Mitaka: Experiences in Japanese Archaeology*, [回顧録] (ICU Hachiro Yuasa Memorial Museum, 2013) には「幸運だった」とある)。ICU はまさに縄文遺跡の上にあり、排水溝や電線設置などの小さな工事があると必ず土器や石器が出る。それを「ICU archaeology」という枠でとらえ、出土地点を発見順に「loc.」として番号を付け、登録していったのである。大学のカリキュラムに考古学実習のクラスができたことで、狭いながらも展示、収蔵、作業用の部屋が得られ、受講生が増えていった。しかし縄文遺跡は日本にゴマンとあり、当時は各地で大学の考古学教室や、熱心な地方史家が小規模な発掘を盛んにおこなっており、キャンパスだけで完結していた ICU の発掘もその域にとどまっていた。報告書が英文で書かれていたこともあって、あまり反響を呼ぶことはなかったのである。

6. 旺盛な執筆活動

最も重要だと思うのは、先生が精力的な執筆活動をはじめたことである。なかでも大手出版社による *Japan before Buddhism* [仏教渡来以前の日本] (Thames and Hudson, 1959) は専門書ではないが、分かりやすく書かれた一般教養書として広く読まれ、ロングセラーとなった。類書と比べて日本の考古学に焦点をあてて紹介したことが大きな特徴で、ドイツ、フランス、ポルトガル、スウェーデン語に翻訳されている。これが好評だったことで、日本の寺院や彫刻を論じた著書がその後、相次いで出版される。日本に住み英語で執筆できる新進気鋭の日本美術史家として国際舞台に登場したキダー先生の 60 年代は、まさに脂の乗った時代だったのである。

ところが、その著作には、*Prehistoric Japanese Arts: Jomon Pottery* [先史日本美術：縄文土器] (Kodansha International, 1968) のように、次第に考古学が多く盛り込まれるようになる。ICU での発掘によって考古学者としての自信を深めていったことがわかる。その他に、邪馬台国論争、騎馬民族説、高松塚古墳壁画発見、藤ノ木古墳の発掘、三内丸山遺跡調査、旧

石器捏造事件など、日本で話題になったトピックスを論文や講演で取り上げ、海外に発信していることも重要である。蔵書のなかでこの時期に出版された書籍が多いのは当然であろう。

7. 旧石器時代の発見

日本の考古学は時代とともに大きく変わっていった。そのひとつが旧石器時代遺跡の発見であった。1946年に群馬県岩宿でアマチュア考古学者の相沢忠洋氏が、それまで何もないと信じられていた関東ローム層の断面から石器を見つけたことにはじまる。保守的な日本の学会の抵抗は大きかったが、明治大学の大学院生だった芹沢長介氏などが中心となって精力的に追跡した結果、縄文に先行する旧石器時代の存在がようやく認められて、この分野は若い研究者の登竜門となった。しかし、旧石器時代の遺物は土中深くにあるために、切り通しの断層で見つけた遺物を拾い出すのがせいぜいで、生活面がとらえられないという問題があった。

1960年代に入ると日本経済はバブル期に入り、宅地造成、高速道路建設、河川改修など大規模な工事が盛んにおこなわれるようになる。さいわい日本には「文化財保護法」があって、工事をはじめめる時は、事前に発掘調査をおこなうことが義務付けられている。とくに、大規模工事は莫大な金額を投入し期間内での完了を急ぐため、発掘する人に日当を支払って作業効率をあげようという考えが出てくる。その結果、保護責任者である都道府県や市町村に発掘を担当する団体が作られ、多くの人を雇い入れるようになった。発掘は従来のボランティア的なものから、「事業」へと移っていったのである。

実情をいえばその間過渡期と言うべき時間があった。ICUキャンパスではゴルフ場が作られる際（これはのちに東京都立野川公園となる）、遺跡が次々に出て、それまでの牧歌的な発掘調査は一転するのである。その頃、私は助手だったが、まだ東京都や三鷹市の行政干渉はなく、あの広いキャンパスを見回るのはキダー夫人とふたりだけという絶望的な状況だったことを思い出す。

8. 野川遺跡の発見

ICU考古学の転機となったのは野川遺跡の発見であった。この時、ゴルフ場内を流れる野川の河川改修工事に対して、東京都から多額の費用が出て発掘調査団が作られたのである。私が在籍していた國學院大學から麻生優先生、東京都の小田静雄さん、その後輩たちも参加することができるようになり大きな成果を挙げたのである。この地点は縄文早期の遺跡 loc. 28 として登録されていたのだが、表土の中から旧石器時代の遺物が採集されていたので、間違いなく遺跡があると考えられた。そこで、関東ローム層を掘り込み平面的に広げていった。深さは最深部で5メートルに及んだが、これは従来の日本では前例のないことだった。その結果それまで石器の形式に依っていた旧石器時代の遺物が層位的に確認され、編

年を書き換えるという画期的な成果となったのである。この実績が1975年のICU考古学研究センターの設立につながり、キダー先生の業績の中でも大きな割合を占めることになる。

興味深いのは、先生には旧石器時代の単独論文がないことで、すべて私や小田静夫氏との共著である。考古学の対象がモノだけではなく自然科学やコンピュータの分野などに大きく広がったこともあるが、本来、美術史家である先生は、石器ばかりのこの時代にはあまり興味が湧かなかったのかもしれない。

私のことを言えば、その後、野川遺跡の仕事を途中で投げ出してしまったという苦い思いがある。野川遺跡のまとめと周辺地区に発掘の口がかかりはじめた1971年に、カリフォルニア大学に留学して5年間を過ごしたからである。先生は私がICUに戻ることを諦めきれなかったようで、考古学研究センターの副所長に指名してくれたが、結局、国立民族学博物館に就職することになり考古学とは距離を置くようになってしまった。先生の期待に応えられなかったのはまことに申し訳なかった。

9. 発掘団長としての仕事：ICU考古学センター

野川遺跡の発掘は学術的成果にとどまらず、その組織、運営がしっかりしていたことで注目された。好景気に沸く当時の日本では、道路や団地などの建設が次々に計画され、事前調査の発掘の必要性は増すばかりだった。ICUには学閥などの人的なしがらみが少ないこともあって、旧石器時代遺跡に興味を持つ他大学の学生や若手が集まってきた。そんな柔軟で活力あふれる開かれた組織の有効性に地方公共団体が目をつけたのだろう、発掘調査の要請が相次ぐようになる。

ICU考古学研究センター設立後、近隣市町村の発掘調査を引き受けるようになった。1973年の西之台遺跡を皮切りに、まず小金井市の遺跡を多数発掘している。それが認められて、より広範囲で東京都の発掘を担当するようになる。団長を務めたのは小金井市以外でも9遺跡を数えた。ついには副団長として沖縄の伊是名貝塚の発掘にまで参加している。また、遺跡というものの性格上、調査する時代も近代にまで広がっていった。

先生は発掘の団長や副団長としての責任を果たすことに労を惜しまなかった。また指導者として、C14年代測定や花粉分析など、当時としてはまだ日本の考古学が消極的だった科学的手法を取り入れている姿勢は注目すべきだろう。発掘報告書は17冊出ている。この種の報告書は英文要約に難があることが少なくないが、キダー先生の手が入っているために質の良いものになっている。論文や報告書の英文を見てほしいという依頼も多かったようだ。その結果、日本の考古学界関係者との交際が広がった。先生の蔵書の中の大きな部分を占めているのが、こういった交友で増えることになった交換、贈呈の本である。

10. クロスノアでの晩年

先生にとって1960、70年代は大変な時代だった。60年代、大学は学園紛争で閉鎖されて

授業ができなくなり、人事面でも亀裂が走った。そんな中で先生は人格と事務能力を買われて学科長、教養学部長などの要職に就いたため、学問とは関係のない仕事が増えていったのである。そして70年代には、各地の遺跡発掘の団長役が加わる。1982年からは副学長と、湯浅八郎記念館の館長（この仕事は大変気に入っていたようだ）としての業務に忙殺される。これらを嫌がっていたわけではないが、本来の自分がやるべき研究と著作に励むことができないという思いがあったのではないだろうか。

1993年にICUを退職した時、夫人の故郷であり、ふたりの青春の地であるクロスノアに居を定めた。先生はここで20年にわたる自分の時間を取り返そうと考えたのだと思う。やる気に満ちていたことは、日本で集めたほとんどすべての蔵書を持って帰国したことからうかがえる。トピックスはたくさんあったはずだが、まず最初に選んだのは卑弥呼だった。*Himiko and Japan's Elusive Chiefdom of Yamatai: Archaeology, History, and Mythology* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2007)は弥生時代以降、東アジアの国際社会に仲間入りした日本がどう諸外国に相對し、成長していったかを論じたものである。女王卑弥呼とは誰か、邪馬台国はどこにあり、どんな社会だったのか、本人が言う「日本史の大きな謎のひとつ」に挑んだのである。邪馬台国の所在に関しては国内では九州説と近畿説に意見が分かれその決着は容易につきそうもないが、先生はそんなことにとらわれず、合理的に論を進めて「近畿」と断じているのが清々しい。

もうひとつは法隆寺である。これも7世紀に日本が東アジアの文明国の一員として確固とした地位を築くにいたる「謎」を解こうとした試みであった。*THE LUCKY SEVENTH: Early HORYU-JI and Its Time*は、先生が来日して以来50年にわたる思いが込められた力作である。できれば大手出版社から出したいという思いもあったらしいが、「最近の商業出版は素人の編集者がいろいろおかしな注文を出すのがカンに障る。自由に書きたいものだ」と言っていて、湯浅八郎記念館から刊行したのである。スタッフの労に感謝していた。

帰国後、研究の原点であった縄文時代についてなぜ書かなかったのかという疑問が残る。縄文への興味は続いていたことは確かだが、モノが中心となる先史学は発掘の現場にすることが肝要であるという自身の経験から、アメリカに帰ってからはそんな立場から離れてしまったという気持ちがあったのだろう。それに比べ、歴史時代は文献が中心となる。とくに、近年は考古学の貢献はめざましく、その成果を取り入れることで新しい面を開くことができると考えたのだろう。当然集めた専門誌の数は多く、日本に来た時は必ず奈良・飛鳥地方を訪れていた。ある意味では、考古学者より美術史家としての原点に戻ったと言えるかも知れない。

11. 書齋の隅にあった雑誌類

先生の最後の著書となった *View from the Trenches of Mitaka: Experiences in Japanese Archaeology* はいわゆる自分史である。少年期から青春時代、そしてICUでの生活、発掘の裏話、夫人

と二人三脚で学問に励み、真摯に生きた姿は心を打つ。

余談になるが、書齋には専門の書籍のほか、隅に雑然と積まれた雑誌や新聞、カタログ類の山があった。先生は野球や映画が好きだった。それは著書や論文には書かれることのなかったキダーさんという個人の別の一面を表すものだった。野球はヤンキース、映画はハリウッドの黄金時代。数年前にクロスノアの家を訪ねた時、テレビで「カサブランカ」を見逃したと言って大変残念がっていた。この映画から話が弾み、夫人と婚約していた青春時代のデイトや教会のこと、ヨーロッパ戦線のことなどを語りながら、近隣を連れ歩いてくれた。私はICUの学生からはじまる50年近い付き合いをしたわけだが、その間ずっと先生のことを、足元にも近づけない偉い学者であり、質素を旨とする敬虔なクリスチャンである人格者として理想化していた。ところがこの偉大な学者にもかけがえのない青春があり、特に戦争でいつ死ぬかも分からないという恐怖を感じた経験があったことをこの時にはじめて知って身近で親しい存在に思えたのである。Dr. Kidderという呼び方は変えることはできなかったのだが。

12. おわりに

本稿はキダー先生の蔵書をめぐって、教え子のひとりとしての視点からその足跡をたどったものである。先生は美術史・考古学の研究者として、日本ばかりでなく国際的に活躍する一方、ICUで長年にわたり教育者として重責を果たした。その業績と影響力の大きさにあらためて驚きを覚えたのである。

蔵書はその人の研究の足跡、所属した分野の時代的な動きを知ることが出来る貴重な文化財である。本稿で述べたように、キダー先生の蔵書については、量の多さに加え保存環境の悪さ、アメリカの片田舎にある日本語の書籍であるという悪条件が重なり、最悪の場合は散逸さえ危ぶまれる状況にある。それを防ぐには、しっかりとした「蔵書リスト」の作成がまず必要であろう。欲を言えばノートや写真を含めた総合的なアーカイブとなることがのぞましい。そのためには専門知識に加えて、多大な費用と時間を要する。先生を慕う教え子たちを中心に、「蔵書リスト作成」の組織が作れないものだろうかと考えている。

